
とある科学の完全調整（フルチューニング）

うきせくさこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の完全調整
フルチューニング

【Nコード】

N 8 6 3 4 W

【作者名】

うきせくさこ

【あらすじ】

起きたら裸で見知らぬ殺風景な部屋。しかも女になってる?! 白衣の男にミサカ00000号フルチューニングと呼ばれる。ミサカ? フルチューニング? 取り合えず裸見んな!

『とある魔術の禁書目録』の世界を舞台にミサカ00000号に憑依した男の死亡フラグ回避ストーリー

第一話

目を覚ますと真っ白な部屋だった。自分の家には、こんな部屋なんてない。

寝ぼけた頭で昨日の事を思い出す。昨日はたしか自室のベッドで眠ったはずだ。じゃあここはどこなんだ？

辺りを見回してみる。いかにも病院とかで見かけそうな機材（脈拍やら脳波測りそうな機械）やらが周りにあって、生活感の力ケラもない。

もしかしてここは病院で、寝ているうちに運び込まれたんだろうか？

取り合えずベッドから起き上がる。てか服着てないじゃねえかと、視線を下げると寝ぼけた頭が完全に覚めた。

—— 20数年お付き合いしてきた息子がいない！？代わりに胸がほんの少し自己主張しているし！起きたら女になっていた！

「起動したか、ミサカ000000号」
フルチューニング

一人混乱していると、白衣の男が部屋に入ってきた。黒髪がボサボサとしていて体格がヒョロツとしたいいかにも研究者な中年の男である。

さて混乱している俺はこの時どんな答を出したか？

気付いたら女になっていた↓白衣の男は何か知っている↓こいつが犯人↓今の状況、少女の裸↓元男と男が織り成す18禁なことをされてしまう↓やられる前に殺れ

普通に考えればどう考えてもおかしいのだが、混乱してるのと、女性の体になり見知らぬ男に裸を見られた嫌悪感からか、怒りが沸々と沸き上がり

「てめえ、こっちにくるんじゃないやねえええっ！！！！」

と男めがけて殴りかかった。

殴ろうと拳を突き出した瞬間、バチバチと音がなり、拳が光りはじめた。

「やめッ！？ぎゃああああああああああ！！！！！！」

やめろと言われても、拳はすんで止まったが帯びた光は止まらない。結局光が男に触れた途端、男は激しく痙攣して倒れた。あ、口から泡まで吹いてる。

改めて拳を見る。先程よりは幾分が眩しさは衰えたが、相変わらずバチバチと音が鳴っている。

——これはもしかして電気か？ロリコン変態野郎による貞操の危機を前にして、能力（）が目覚めたとかいうやつなんだろうか？

——そんなバカなことを考えながら、この世界の——ミサカ0
フルチョーニング
0000号としての日々が始まった。

第二話

白衣の男との一連の騒動は外まで響いたらしい。慌てて研究員らしいやつらが何人が駆け付けてきた。（こちらも慌ててベッドに逃げ込んだ）

白衣の男は失心したままなので、襲われそうになったから殺った、反省はしていない——と彼らに伝えた。白衣の男が研究員に運ばれて行くとき、彼に対する視線がやや痛かったのは仕方ないだろう。反省してこい、ロリコン。

ともかく今の状況がわからないので、着替えを持ってきた女性研究員に話を聞いてみた。

まずここは学園都市にあるラボの一つだそうだ。

学園都市というのは超能力を科学的に研究、開発を行う都市のことらしい。超能力というのは、物理法則を捻じ曲げて超常現象を起こす力なんだそうだ。先程の電気のようなものや、他にも火や風を操ったり、瞬間移動なんて能力もあるらしい。

この超能力は学園都市で脳の開発を行うことで後天的に身につけられるのだという。

しかし能力は個々によって異なる上、必ずしも能力が身につくとい

うわけではない。

学園都市では、超能力を強度で格付けしている。

レベルは0から5の六段階で分けられている。

無能力者、あるいは能力が弱すぎる者はレベル0に分類されるのだが、これは能力開発を行ったものの6割が該当するそうだ。

そして、レベルが上がれば上がる程、相対的に数が少なくなる。

ちなみに超能力者（レベル5）は、学園都市でも7人しかいないが、1人で軍隊と対等に戦える程の力を有しているらしい。

そのため、強い能力者や能力の種類に関しては運の要素が強い。

そこである計画が立案された。量産能力者計画である。レディオノイズ

超能力者（レベル5）の遺伝子配列のパターンを解明し、超能力者を生み出す計画だそうだ。

つまり超能力者のクローンを作成し、超能力者を誕生させるという計画である。量産されたクローンは軍用として利用されるのが決定済み。

人道？なにそれ美味しいの？のような非人道的計画なのだ。

そして、その非人道な計画こそこのラボの研究であり、クローンの
第一号である検体番号0号——ミサカ000000号^{フルチューニング}こそ俺なのだ。

……俺、終わったかもしれない。

第三話

衝撃的な話を聞いたあと、しばらく呆然としていたが、研究員たちはそれに構わず、頭や体に妙な機械を付け始めた。どうやら実験体である俺のなにかのデータを取るようだ。

正直実験体になるのはごめんだし、いつそのこと全部話すべきだろうか？実は俺は男なんだと。

……駄目だ！どうやっても廃棄処分やら解剖フラグな気がする！
！飯にそれから逃れられたとしても、普通は信じてもらえないだろう。俺だって信じられないし。

そうこう考えながらなされるがままに数時間ほど検査をされ、その日は終了となった。

寝泊まりする部屋に連れていってもらい、夕飯？として渡されたブロッコ食をかじりながら、一人になって改めて今の状況を考えるみる。

学園都市は東京にあるらしいのだが、そんな場所は聞いたことが無く、超能力とか超常現象が一般的に存在するなんてのは、二十数年

間培った俺の常識にはない。

つまり、ここはアニメの世界のような異世界であるということ——
|。

となると親や友達と連絡をとるのは無理だろう。急に不安になってきた。

仮に外の世界に逃げたとしても頼れる相手がいないし、戸籍自体もないから生活のしようがない。

ただ異世界に來ただけならともかく、まさか実験体に憑依するなんて。どこぞの出来の悪いSFみたいな話である。
前に見た二次小説なんかだったら、最強な能力を持って俺TUEE
E出来ちゃったりするんだろうが……。

………待てよ。そういう意味では、この世界の七人しかいない超能力者（レベル5）のクローンなんだから、もしかして俺ってとんでもなく強いのか？

改めて電撃を放った手を見る。流石にもう光っていない。

どうやったら、電気を出せばいいのか——たしか女の研究員が超能力は自分だけの現実が重要であると言ってたっけ。

バーソナルリアリティ

専門用語も混じってたからよくわからなかったが、ようは本来有り得ないことを有り得ることとして認識する——例えば俺の右手から電気が出て当たり前って考える事なんだろうか？

……妄想乙だな。意外と厨二には優しい世界なのかもしれない。でも、さっきは特に何も考えずに出来っけ。もしかすると感情は能力に影響を及ぼすのかもしれないな。

取り合えず右手に電気が集まるようにイメージしてみた。するとすぐに光りはじめ、電気を帯びはじめた。

「おおおお！なんかすげえ！！」

思わず独り言をしてしまうほど興奮してしまう。超能力が使えるなんて男のロマンだよな！

少し希望が出てきたな。しばらくは実験体として生活して、まずはこの能力に慣れていこう。あくまで能力者の量産計画なわけだし、量産されるまではすぐに戦場やらに送られることはないはずだ、多分。最悪、レベル5の力があればなんとかなるかもしれない。

じゃあ寝るか。

洗面所で初めてまともに自分が憑依した少女の顔を見る。

……これはヤバいな。顔が整っていて可愛いんじゃないか？幼さは感じるものの、それが相まって可愛らしさが増している。多分もう少し成長したら幼さが抑えられ、綺麗に感じるんだろう。くそ！出来れば男としてお友達になりたかった！！

………こういうのもナルシストと言えるんだろうか？複雑である。しかしながらロリコンや肉食系男子には気をつけよう。これは本気で貞操がヤバイ。

………女の体になったが、いつかは男に惚れてしまっただろうか？少し鬱になった。

洗面所から戻り、パジャマなんてものはないから、仕方ないので服を脱ぐ。にしても、どこかの制服なんだろうがなんで制服なんだ？

下着姿になり、寝に入ろうかとしたところで急に扉が開いた。

「00000号！私に刃向かうとはどういうことだ！！お前はこれから再調整して……！！！」

……ああ、なるほど。一日の△はお前か白衣の男。裸を見た罪をあれで許そうとしたが、足りないというわけだ。負けたよ。お前は悪い意味でのロリコンの中のロリコンだ。

だからもつとすごい電撃を浴びせてあげよう。これが……俺の全力全開……ッ！！！！

騒ぎを聞き付けた研究員がまた駆け付けてきたが

「夜ばいされそうになった。恐怖で能力が暴走した。これは正当防衛である（キリッ）」

当然運ばれていく白衣の男への視線は皆冷たかった。

第四話

翌日

今日も検査を行うらしい。ただ今日は定『システムスキャン身体検査』つまり能力の測定を行うようだ。たしかに自分の能力がどれくらいなのか知っておくに越したことはない。今は知ることが大事だ。

ついでにオリジナルになった超能力者の能力とかも見ることは出来ないか。と言うと能力測定後に資料を渡してくれることになった。

なんでもオリジナルの少女は幼い頃から様々な検査を行っているため、資料ならば膨大にあるらしい。だからこそ、その少女がオリジナルとして選ばれたという訳である。よりオリジナルに近いクローンを作るために。

測定後はある程度の自由は与えてくれるようだ。能力を自由に使っているように訓練室も開放してくれるらしい。

もつとも自由に行き来できるのは、自室とそこだけで他の部屋の立ち入りは禁止されたが。嗚呼外出してえ。

身体検査はまず電気の出力の測定から始めることになった。レベル5の全力を発揮すると、機器が故障するので徐々に出力を上げていくように指示される。白衣の男がいたが——何か言い足そうに苦

虫を潰したような顔でこちらを見ていたが無視した。

集中して出力を徐々に上げていく。研究員たちも、初めてクローンから能力を使っているのを見て感嘆の声が上がる。まあ実際見たのは白衣の男だけだしな。

「00000号、もつと出力をあげる」

白衣の男に言われ、また徐々に上げていく。このやり取りを何度か行った。しかしそろそろこちらは限界な気がする。能力使うのつて意外に体力つかうのな。ちなみに白衣の男は天井と呼ばれていた。どうやらこのラボではかなり偉いヤツらしく、ヤツを中心し測定結果が出ているであろうモニターを覗き、研究員に指示を出している。

しかし体力はまだなんとかなるが、そろそろ出力の限界が近い。

「出力が限界みたいだ。これ以上出力を上げられない」

「何……………」

天井は訝しい目でモニターを睨む。

「バカな…………。超電磁砲^{レールガン}の1%ほどだぞ。どういう事だ？」

周りの研究員も騒然としはじめる。どうやら問題が発生したようだ。俺なにか間違ったことでもやったんだらうか？

「00000号、身体検査を終了する。先の資料を受け取ったら自由にしていいぞ」

そのあと色々なことをやらされたが、天井や他の研究員の顔が陰しくなるばかりだった。なにがなんだかわからないまま俺は部屋をあとにした。

超電磁砲の1%——天井の言葉が気になる。これがキーワードだ。

渡された資料に目を通す。そこには俺の顔そっくりの活発そうな少女の写真があった。

——彼女の名前は御坂美琴。能力名は『超電磁砲^{レールガン}』。元々は電撃使い（エレクトロマスター）なのだが、彼女が編み出した技を元に自らその異名を名乗っているらしい——クローンである俺のオリジナルに当たる少女である。まさかオリジナルが厨二病を患っているとは。クローンの身としては嘆かわしい。

つまりレールガンとは兵器ではなく、彼女のことだろう。

ということは、今の俺の力はオリジナルの力の1%ぐらいということか？！おいおい俺TUEEEフラグがポツキリ折れたぞ！そのかわりに廃棄処分という名の死亡フラグが！！

待て、まだ慌てるような時間じゃない。素養はあるんだ。
能力を上げればいいんじゃないか？

資料にはオリジナルは元々レベル1の能力だったが、様々なカリキュラムを経てレベル5になったと記載されている。となると訓練次第では能力は上がるはずだ。

レベル5ではおよそ10億ボルトもの電撃を放てるようだ。これの1%となると俺が使える電撃は1000万ボルトか？ピカチ○ウ越えたな。

てか、オリジナルは化け物か？某海賊漫画の悪役雷人間より凄くないじゃないか？

オリジナルのデータだと、だいたい俺の能力はレベル3に相当する。となるとオリジナルよりは早く上げられるかもしれない。

よし、早速特訓だ！存在価値を高めて廃棄処分は免れるんだ！！

第五話

訓練室はかなり広い空間だった。

まずオリジナルの能力がいくつか資料に載っていたので、レベル3でそれができるのか試してみよう。ちなみにいくつかは身体検査のときにやったしな。

まずは電撃の槍。高圧電流を槍のように飛ばす遠距離系の技だ。これはなんなくできた。射程に関しては、20～25m程でそれ以上になると消えてしまう。威力も距離が遠ければ遠いほど下がるようだ。オリジナルは視界内すべてが射程範囲らしい。

落雷を誘発できるようだがこれは外でないとできないからパス。使うときになったら絶対ラ○デインって唱えてやる。

次に磁力の操作だ。電磁力を利用した技で、オリジナルは砂鉄で剣を作ったり、砂嵐を巻き起こした攻撃的な使い方や、一時加速、浮遊の移動手段としての使い方、レーダーのような空間認識など幅広い扱いが出来るらしい。

訓練室はそうした訓練も想定してか、幸い砂鉄やら鉄板も置いてあった。

磁力を利用した引力と斥力をやってみよう。まずは引力、鉄板が宙に浮き手に収まった。なんかスターウォー○でジ○ダイがライトセ

○バーをフースで引き寄せるのを思い出すな。斥力も問題なくできた。

しかし砂鉄の剣は難易度が高いようだ。オリジナルは磁力線を目視できるらしいが俺はできないので、剣の形にするのも難しかった。

なんとかそれらしい形にしていざ鉄板を斬ろうとしても砂鉄の剣と鉄板が磁石のようにつつついただけである。表面を振動させることで切れるらしいのだが。そこまでの制御はどうやら無理そうだ。磁力線が見えればなんとかなるかもしれないが。一度、天井たちに相談してみるか。

砂嵐は簡単だった。ただ想像していたよりショボい。人が2〜3人だけ入れるぐらいのつむじ風だった。視界を遮るのには役に立つのか？

次は加速を試してみる。磁石みたいに引力や斥力を利用することで実現できた。ただ一時的なのがあ。緊急回避には便利だろうが常時使えないもんだろうか？こう身体強化的な。

あ、そういえばあつたぞ、漫画の技だけど。たしか某狩人×狩人で暗殺一家の三男が使ってた技だ。末梢神経を電気で操作して速度や反射速度あげたりしてたっけ。やってみるか。

………複雑な神経を操作するためかなり制御が難しかったができた。今なら小足みて昇竜余裕な超反応をリアルでできるだろう。ただ課題としては制御が複雑なため攻撃を同時に行ったり、磁力利用の移動の併用は無理みたいだ。しかしこれは使える。ありがとう暗殺一

家の少年よ。これで俺はまたひとつ強くなれた。漫画・アニメの技は参考になるかもしれない。くっ、燃えてきたぜ俺の妄想力が！いつか全部実現してみせる！

浮遊は広い空間のこの場では試せなかったので磁力を利用した壁登りをやってみた。気分は蜘蛛男である。しかし、スカートが短いせいでパンツまる見えだな。スパッツかなんか買ってもらおう。俺は痴女じゃないし。

他のオリジナルが使用する能力については、今日はやめることにした。例えば誘導加熱による加熱——いわゆるレンジでチンするアレだが鉄板とかやったら危ないだろうし、レーザーやパソコンのハッキングなんかは対象や機器がないとできないので天井たちに許可を得ないと必要があるからだ。

最後にオリジナルの異名ともなった超電磁砲を試してみる。これはレベル5ではじめて使える技のようだから、できない可能性が高いが。

超電磁砲はコインを弾丸として用い、指で弾く形で撃ち出し音速の3倍以上で放つ。軌道上にある物を全て薙ぎ払うという恐ろしい技だ。空気との摩擦熱でコインが溶けてしまったため射程距離は50mとそれほど長くないが、弾丸の質量を変えれば威力や射程を伸ばすことができるらしい。実際の硬貨を使ったら、貨幣損傷等取締法に引っ掛かる技だな。人にむけて使う技では絶対じゃない。

で試してみたのだが。コインを飛ばすことは出来た。普通に飛ばすよりは強いだろう。辺り所が悪ければ、気絶ぐらいはできそうである。しかしコインは溶けないし、速さも音速を越えた気はしない。これなら電撃の槍か銃のほうが強いだろう。

一通り技を試し、復習しようとしたところ電撃が出なくなった。焦ったがどうやら電池切れという現象のようだ。ゲームによくあるMPがきれた状態なのだろう。休憩すれば時間とともに回復するらしい。

仕方がないので、普通に身体を鍛えることにした。オリジナルは能力も凄いが、身体能力や知力も凄いというパーフェクトな存在なんだとか。それらの要素も能力向上に関係しているようだし、軍に回されるかもしれないから体も鍛えないと。勉強に関しては天井たちと相談だな。どういった知識が必要なのかわからないしな。

やることは多いが生き残る為に頑張るぞ……………。

第六話

一週間過ぎた。

目が覚めても、元の世界に戻るなんてことはなく、慣れない日々を過ごしている。両親は元気にしているようだろうか？あなたがたの息子は少女になって今料理してます。

きっかけはこちらの世界にきて三日目のことだった。それまで出てきた食事が全てブロック食である。なんだよ、プレーン↓チョコ↓チーズ↓フルーツって！ループに気付いた時、流石にキレて天井（ちなみに名前は亜雄）に電撃かましてやった。

で交渉した結果、調理場（なんでラボにこんなのがあるんだ？）を借りて料理することになったのだ。料理ができるなら、今後自由に調理場を使用できる許可と買い物限定の外出許可付きで。天井は料理できるように調整してないからできるわけがないと高をくくっているようである。

だがしかし、元の世界では学生時代から一人暮らしをしていたこともあって多少なりに料理はできるのだ。完成した料理を見て呆然とした天井に思わずドヤ顔したのも悪くはないだろう。

出来も悪くは無かったので、食べるか？と天井に聞いたところ、天井は人形が作ったものを食えるか！と捨て台詞を吐いて去っていった。あの野郎。いつかあいつのパソコンにI love lollit aって壁紙に変えてやる。

実のところ、俺が人形扱いされるのはなにも天井だけではない。ここにいるほぼ全ての研究者は似たり寄ったりな認識のようである。前の夜ばいの件も少女に手を出した天井は変態であるというよりは、人形にまで手を出す天井は異常性癖者であるという認識なのだ。まあ、どちらにしても天井は変態なわけだが。

まあそんな訳で、あまり深く関わることはない。必要最低限しか話さないし、名前を覚える機会がない。

……正直に言うとかかなり凹んだ。人間扱いされないことに。友達も出来ない。ひどく孤独なのだ。量産型能力者計画が進めば、同じクローンの子が増えるのかな？そうなると俺から見れば妹みたいな存在になるんだろうか。そいつらにはこんな孤独な気持ちは味あわせたくはない。なるべく優しくしてあげよう。姉として。

なお、天井は違う意味でぼっちである。研究者としては一目を置かれていてるものの、あまり好かれてはいないようだ。この間も研究員たちが互いに誘い誘われ食事に向かう最中、一人だけ誘われてなかったし。少しだけ俺の憐憫を誘った。

かなり話しがずれたが、まあそんなわけでひょんなことから外出許可と料理する権利を得たのである。

それから、身体検査は順調だ。徐々にはあるが、電撃の出力は上がっている。天井も何故クローンがレベル5にならないのかは疑問

に思っているようだが、能力向上の結果は喜んでいられるらしい。能力が強いと脳の演算処理が早い、つまり頭がいいということを知ることが出来た、憑依した俺の知能の問題かとも思ったが、どうやら別問題のようだ。

訓練や勉強に關しても順調である。訓練は漫画の電氣や雷を使う技を思い出しながら試してみたり、前回試せなかった能力に關してもやることのできた。

勉強に關しては、実は洗脳装置テストメントと呼ばれる装置で、既にオリジナルと同程度の知識を有しているらしい。軍事利用も考えているため、銃の使い方なんてのも学習済みなんだとか。んなバカなと思って英語の本を見ても普通に読めるし、訓練室で射撃も出来た。洗脳装置すげえ。元々の000000号の人格も洗脳装置で天井が調整していたものだそうだが。ただ今の000000号の人格にはならないはずだと、首を傾げていたが。……まあ、普通憑依するなんてのは気付かないよな。

そんなこんなしていると瞬く間に一週間過ぎたのである。

朝食を済ませたあと、検査が始まる。これは日常のスケジュールと変わらない。ただ今日は一つだけ違うことがあった。見知らぬ女性がいる。誰だろうか。

ウェーブのかかった黒髪がギョロとした目が特徴の若い女性だ。こういつてはなんだが暗がりで見かけたら、心臓に悪いかもしれない。視線があつたので軽く会釈した。

「probably、あなたが000000号かしら？」

「ああ、そうだがあんたは？」

「布束砥信よ。よろしくね」

「ああ、よろしく」

ここに来て、初めて挨拶らしい挨拶を交わしたので、ニツコリと笑いかける。一瞬、いきなり英単語が出たのでお前はルー〇柴かとツッコミたかったのは内緒だ。キャラ作りに悩んでいるのかもしれない。安心しろ、外見は立派にキャラが立ってるから。でも気にしてるかもしれないから黙っておこう。

布束砥信は、あらためてこちらに笑顔を向ける彼女—— 〇〇〇〇〇
〇号のことを考える。

（本当に感情が豊か——。But、これはどういう事？）

本来天井亜雄が施した人格調整では、従順で大人しく感情が表に出ない人形のような性格になるはずだ。元々、彼女は洗脳装置の監修をしていた実績を買われ、この計画に参加した外部スタッフだ。その彼女から見ても、天井の調整に問題はなかった。だが〇〇〇〇〇〇号は全く違う結果を見せている。

（本当に作り物なの？これではまるで――）

布束は頭に過ぎった言葉を掻き消した。それを認めてしまえば、研究の根幹を問うことになる。

そんな事を考えながら、ただ彼女を見つめ続けた。

第六話（後書き）

布束砥信さんの口調は難しいですね。

第七話

ギョロ目ちゃん事、砥信さん——外見では自分が年下だからそう呼んでいる、とはよく話すようになった。外見だと年が割と近かったし（高校生らしい）、礼儀には煩い人だけど意外と話しやすかったりする。砥信さんはその歳で洗脳装置の開発に関わったスペシャリスト。その関係で、量産型能力者計画の妹達（シスターズ——クローンの総称）の人格調整を担当しているらしいんだけど、元々の計画のメンバーではないため、天井からはいい顔はされていない。

「砥信さん、砥信さん、お昼一緒に食べない？」

「ええ、いいわ」

今では昼食も食べる仲だ。

「Well、明日他の妹達が完成するのは聞いている？」

「え？いやまだ聞いてないよ」

そつか、とうとう他のクローンが生まれるんだ。どんな子なんだろうな。

「Incidentally、この研究所で5体、他の研究所でも10体以上造られる予定よ」

「え、他の研究所でもこの研究やってるの?!」

「ええ、様々なデータの収集は必要。besides、計画終了後のことも考えての事よ」

つまり軍事利用のための量産体制の下地も整えておくって事か。

「誕生する瞬間とか立ち会ってみたいなあ」

「それは天井に聞かないとダメね」

あとで天井にダメ元で話したら、すんなりと許可を得た。なんか機嫌がよかったみたいで、こぼれる笑みを隠しきれていなかったし。なんでだ？

培養液と思われる液体が詰まったポッドが沢山並んでいる。そこには同じ顔した少女たちがいた。中にはまだ俺より幼く見える子や赤ん坊みたいな子もいる。

「よし起動しろ」

天井の号令とともに液体が排水され、ポッドが開く。すると全裸の少女が重力に負けてかペタンと座り込んだ。しばらくは呆然としていたが意識がはつきりしたすと、状況を理解出来ないのか、キョロ

キヨロと辺りを伺う。

か、かわいい……………！！！！なんだこの生き物！！！！！！パネえ、妹達。パネえ！これを軍事利用とかありえないだろ、常識的に考えて！！

そう興奮していると、少女はワンワンと泣き始めた。仕草だけみれば完全に赤ちゃんである。

少女は研究員たちとともに別室に連れて行かれる。恐らく、洗脳装置による学習や人格調整を行うんだろう。作業は翌日までかかるようだ。1日かかるとはいえ調整って意外と早く終わるんだな。

翌朝目が覚めると、なにかがおかしい。誰かに見られているような何かが繋がっているようなそんな不思議な感覚だ。流石に異常かもしれないと思つたので天井に相談した。

「ああ、それはミサカネットワークのことだろう」

「ミサカネットワーク？」

「脳波リンクのことだ。妹達は全員同一の脳波であり、能力も電気操作能力だ。これを利用して、脳波を電気信号として発信し、意識や思考、経験などの情報を共有できる。ただし許可した情報であればな。理論上では、記憶のバックアップや演算の並列処理なども可能はずだ」

なるほど、ようは妹達内限定のインターネットってことか。というか、こんなに見える天井を見るのは初めてだな。

「ネットワークを利用した会話もできるはずだ。すでに検体番号5号までは稼働している。試しておいてはどうだ？」

なるほど、んじゃ早速。

——あー、テスト。こちら00000号。聞こえていますかー？

（こちらは検体番号1号です、とミサカは応答します）

（こちらは検体番号2号です、とミサカは応答します）

（こちらは検体番号3号です、とミサカと応えます）

（こちらは検体番号4号です、とミサカは返事します）

（こちらは検体番号5号です、とミサカは返事します）

……この口調は妹達内で流行りなんだろうか？調整の影響かな？

——ミサカネットワークのテストで会話してみたただけなんだからまあ何かあったら連絡しようぜ。あとで直接会えるやつもいるだろうけど、今後ともよろしくな。

（『よろしく願います、とミサカは願います』）

ネットワークに問題はなさそうだ。

「問題なく会話できたよ。そういえば他の妹達は？」

「これから身体検査中を行う。お前もついてこい」ようやく、妹達と直接対面できるのか。やったね00000号、家族が増えるよ！

外見も服も同じ。びつくりなほど見分けがつかない五つ子が検査室にいた。ミサカネットワークのおかげで各人の検体番号がわかるので識別できるが、無ければ見分けられる自信がないな。それにしてもみんなして無表情だな。

「よお、俺がさっき話した00000号だ。改めてみんなよろしくな」

『よろしく願いますとミサカは答えます』

ぺこりと無表情で頭をさげる妹達。かわいいけど、あまり感情を表に出さないんだな。はじめての顔あわせで緊張してるのかな。ちょうど傍にいた砥信さんに耳うちしてみた。

「砥信さん、あの子たち緊張してるのかな？さっきから無表情だけど」

「緊張？有り得ないわ」

え？有り得ない？

「そもそも喜怒哀楽などの感情は全て妹達にはないわ。元々感情は洗脳装置の調整に含まれていないもの」

え？じゃあそれって？

「妹達は感情がない。……………人とは違うのよ」

その一言はずきりと胸に響いた。

第八話

あれから砥信さんとは余り話していない。話していると気まずくな
ってしまい、どちらかが会話を終わらせるからだ。

聞いた当初は、砥信さんも他のやつらと同じように俺を含めたクロ
ーンを人間のように思っていないのかと絶望した。知り合って一ヶ月
も経ってないけど、友人だと思ってた人の一言はそれだけ重かった
のだ。

しかし今は落ち着いたので、冷静に考えることができる。今までの
砥信さんと話しをしてきた感じは、少なくとも他の研究者たちとは
違うものだったはずだ。だからあの言葉はむしろ……。

けれどそれを肯定できるだけの確証がない。聞けばいいんだろうが、
正直いうと怖かったりするのだ。否定されるのが。俺や妹達は人じ
やないと言われるのは。だから悶々とした日々が続いている。

そんな悶々とした気持ちは関係ないとにかく、ミサカネットワー
クは徐々に賑やかになってきている。

この研究所では見かけないが、他の研究所でどんどん妹達が誕生し
ているようだ。今確認しているだけでも50人を越えている。確認
される度に挨拶をネットワーク経由で送った。他の妹達も挨拶した
り頻繁にネットワークを利用していろいろだ。

うちの研究所にいる妹達を見る。このところよく一緒になるようになった。

相変わらず無表情で、笑ったりすることはない。一緒に訓練してみたり、料理を手伝わせてみたり、食べさせてみたりするがあまり反応はない。何かを食べたとしても美味しい、まずいといった感想は出るのだが、あくまで淡々としている。

砥信さんのいうように感情という概念は本当にないんだろうか？妹達にも聞いてみたが結果は砥信さんと一緒だった。だが自分にはどうしても信じられない。

どちらかというと、感情がないのではなく育っていないだけなんじゃないかと思うのだ。赤ん坊の頃は泣くか笑う——それだけじゃないけど——といった、単純だがはつきりとした感情を表に出しやすい。だが、人は成長すれば色んな経験を経て感情はより複雑になり、抑えられるようになる。

妹達にはそう言った経験がない状態で成長させた。だから感情は抑える部分だけがいびつに成長してしまい、それが弊害になって感情が育っていないのかもしれない。まあ、これは全て憶測に過ぎないが。

幸い妹達は好奇心が旺盛だ。昨日も料理の仕方を学習してたっけ。うまくいかに焦げた物体を食べたりしたけど。

知識はあるが経験はない。それはそうだ、中には昨日生まれたばかりの子もいるのだから。だから、きつと時間が経てば感情が芽生えるはずだ。

計画が終了する前には感情が芽生えて欲しいな。そして砥信さんや他の奴らに俺を妹達の事を認めてもらうんだ——妹達は人として生きているんだって。

人して認められたら、研究者たちも今の計画について思い直してくれないだろうか。そんな飛躍した考えが頭を過ぎる。量産型能力者計画の計画を軍用じゃなくて平和的な利用に変えてもらいたいのだ。例えば、学園都市内の警察みたいなものに協力するとかいいんじゃないか？学園都市は超能力者ばかりだし、悪用するやつだっているだろう。だからきつと学園都市には警察のような組織が存在するはずだ。そこに妹達全員雇ってもらおうのである。

電撃なら相手を傷付けずに取り押さえれるし、ミサカネットワーク使えば犯人追いかけるのに役に立ちそうだしな。

まあその考えは飛躍しすぎか。実現は難しいかもしれない。けれど、研究者があるいは軍関係者が、妹達を人として見てくれたら、人形として扱われるよりも、危険で粗雑な扱いをされにくくなるだろう。

そんな日がくればいいな。そう切に願った。

けれど、俺達を取り巻く状況は嘲笑うかのように急変するのである。

第九話

00000号ですが、研究所の空気が悪いです。

何故空気が悪いのか。それは研究が芳しくない———というか問題が発生したからである。問題とはなにか？それは妹達の能力のことである。

妹達の能力は身体検査の結果が、レベルは3または2であつたからだ。（ばらつきに関しては個体差があるらしい）

元々俺に関しては完全な試作品、つまりクローンを生産するに当たり不備や不具合がないかどうかを確認することが意味合いが強い実験動物だつたそうだ。

そのため、レベル5として生まれてこないという問題は発生したものの、クローンを生み出す理論は確立したので、あとは問題を分析し解明すればいいだけの話である。オリジナルや俺の検査結果を比較し、不具合の原因と思わしきデータを調整し直す。そんなフィードバックを繰り返せば、妹達はレベル5として生まれるはずだつた。だが結論はレベル5にならなかつた。想定される不具合を全て修正した上、50体以上もの素体で試したものの、当初の想定とは違う結果を見せたのである。計画の進行が停滞してしまったのだ。

そのため研究員たちは険しい顔をしているし、天井も上司への経過報告などで忙しいらしい。

ここでもしクローンがレベル5になれないと言うことが確定したら、

量産型能力者計画は凍結し、俺達の廃棄処分は覆せないだろう。

残る可能性は能力の成長だ。オリジナルがそうであったようにクロ
ーンもまたそうでは同じなのではないか。

この間俺はようやく身体検査でレベル4と診断された。そもそもオ
リジナルが成長できたから、成長できるのではと軽く考えていたが、
レベル3からレベル4にシフトするのも成功例は少ないそうだ。た
だその結果、オリジナルのようにカリキュラムをこなせばレベル5
になれるのではないかという可能性が強まったのである。

後天的な学習で成長が可能ならば、軍事利用で考えれば即戦力にな
らないのは問題になるかもしれないが、レベル5は7人までしかい
ない希少価値も考えると十分に検討に値する。

まあ問題がないわけではない。

それはレベル5に到達するまでに要する時間だ。ちなみにオリジナ
ルでもレベル4からレベル5になるのに年単位で時間を要している
のだ。それ以上かかる可能性がある。

それに妹達が個体によってレベル5に到達できない可能性もある。
量産型能力者計画は偶発の産物であるレベル5を確実に生み出し量
産する事が前提だ。これが偶発となると話が変わる。

そもそも理論が崩れた以上、本当にレベル5になれるのかどうかも不明なのだ。

できるかできないかわからない事のために何年も費やす事は難しい。研究にも資金が必要だ。できない可能性の高い研究は凍結されるだろう。

だが、なにか確証となるものがあれば別である。

学園都市にはそれを可能にするものがあつた。それが樹系図ツリーダイアグラムの設計者だ。

これは正しいデータさえ入力してやれば、完全な未来予測がシミュレーションできるという超高性能コンピュータなのだ。樹系図の設計者が弾き出した結果は学園都市内で確定事項となるため、クローンがレベル5になれるとなれば、研究の継続は確定する。

樹系図の設計者はすぐに使えるわけではない。使用権限は学園都市の上層部の許可が必要になる。そのため天井は上司を通じて随分前から申請していたようで、すでに研究データを渡しており、あとは結果待ちである。

「というわけです、とミサカは簡潔に説明します」

「ふむ成る程な」

ちなみに今までの説明はミサカ1号たちと俺が情報を補完しあつてまとめてくれたものである。

今までわからないことは砥信さん経由で聞いていたが、砥信さんとはまだ仲直りできてないし。あ、なんだか悲しくなってきた。

「何と言つかまじでやばい状況なんだな」

「計画が凍結しても、他の計画に召集される可能性もあるのですぐ様廃棄処分はせず、培養器で保管されるだけではないでしょうか。もっともそのまま処分される可能性もありますが、とミサカは推察します」

寝てたら処分か。うわ、まじで怖いわ。想像して身震いするくらい。みんなは自分が廃棄処分されることについてどう思ってるんだろう。

「怖いこというなよ、3号。お前達は廃棄処分が怖くないのか？」

「00000号、前にも言いましたが、妹達に感情という概念は存在しません。だから怖いと言う意味は知っていても理解はできません、とミサカは物覚えの悪い00000号に呆れながら答えます」

……たまにこいつら意地悪だ。砥信さん洗脳装置で悪口をインストールさせたんだろうか。

「00000号は何が怖いのですか、とミサカは首を傾げながら尋ねます。そもそも計画が凍結した場合、私達の存在意義も失われるのですから処分は最善であります、とミサカは述べます」

存在意義か。

「そりゃ死ぬんだから怖いに決まってる。死ねばやりたいこともできないだろ」

「やりたいことですか？とミサカは疑問を投げ掛けます」

「おう、自由に外出できないから、自由に外にも出てみたいしな。買い物のみしか出られないから、学園都市の一部しか知らないし」

学園都市は他の都市と比べて数十年先を進んでいる最先端の都市なんだとか。きつと珍しいものがありそうだ。

「それに計画だけが全てじゃないんじゃないか。だいたい存在意義が無くなったら死ぬ殺すなんてのもおかしいだろ。その理屈でいけば天井たち研究者だって研究できなくなったら、処分になるぞ」

「ですが彼らは人です、とミサカは反論します」

彼女たちも、人と妹達は違う生き物と考えているようだ。だが違ってなんだ？

「じゃあ聞くが4号、俺達と天井たちとの違いはなんなんだ？感情の有無か？クローンだから違うのか？感情や生まれだって人それぞれ違うだろ。だったら大差ないんじゃないか、俺達は」

「やはり00000号は変わっています、とミサカは正直に伝えます」

妹達はそう答えながら、少し何かを考えているようだった。

本当はもっと時間が欲しい。彼女たちが考える時間を。けど、それには時間が足りない。このまま停滞して時間が稼げればいいんだが。そんな願いも虚しく、樹系図の設計者の結果が出たのは数日後のことだった。

その日、量産型能力者計画の凍結が決定した。

第九話（後書き）

次話辺りから徐々に独自設定やら乖離が多くなっていくと思います。

第十話

1・妹達的能力は『欠陥電気^{レディオノイズ}』である。レベルは3または2（個体差による）であり、それ以上進化できない。

2・00000号のみレベル5に進化できる。レベル5に進化するには、超電磁砲がレベル5に進化したカリキュラムで15年を要する。

3・00000号及び妹達の耐用年数は10年であり、レベル5に進化することは不可能である。

上記の結果から、量産型能力者計画は実現不可であり、計画を凍結する。

これが樹系図の設計者から導き出された予測演算を元に上層部が下した結果だった。

「理論に問題は無かったはずだ！だが、何故ダメなんだ！」

研究を主導していた科学者——天井が叫ぶ。

妹達がレベル5になれないと、計画の凍結が決定した日、研究者たちは多いに荒れた。

学園都市が誇る最高の超能力者。それを量産できる偉業。都市内でも一流の科学者たちを集めた計画。成功するはずだった。科学者として後世に遺る偉業をなしとげ輝く未来になるはずだった。

だが結果は欠陥だらけの能力者を生み出しただけ。こんなガラクタならば学園都市には吐いて棄てるほどいる。

唯一の成功例も進化する想定していた耐用年数を越えた年数が必要になる。これでは成功例とは言いがたい。しかも元々試験体で造られた素体が成功例だなんて、飛んだお笑い草だ。

故に心は荒む。そしてそれを晴らす予先を探す。欠陥の烙印を押された少女たちが選ばれるのに時間はかからない。研究対象であるため直接手を上げるものはいなかった。しかし、出来損ないや欠陥品と口汚く罵る言葉は全て少女たちに向けられる。

そんな悪意に包まれた中、その言葉すら届かない少女がいた――
00000号のことである。

計画凍結したと同時に余命を宣告された00000号です。あはは

ははははは、なんだこれ、もう笑うしかねえ。

絶望した！この世界の厳しさに絶望した！

非人道な計画、軍事利用、廃棄処分、最後は寿命短いとか死亡フラグ乱立しすぎだろ！この世界はどんだけどSなんだよ、バフ。リンだって半分は優しさで出来てんぞ！！胃腸に優しい成分だがな！！もつと命大事にして下さい！！！！あまりの酷さに錯乱したじゃねえですか！！！！！！

あー逃げ出そうか、こんな所。廃棄処分も考えられるしな。

よし、こんな時はミサカ会議だ！——説明しよう！ミサカ会議とは、ぶっちゃけミサカネットワークを使った妹達との会議である。

議題はみんなで研究所から脱走するか否かだ。

投票結果

賛成 1

反対 50

圧倒的……………ッ！圧倒的否決ッ！！

以下、主だった妹達の反応。

「ミサカネットワークに存在する限り、居場所はずぐ見つかります、とミサカは無知な000000号に忠告します」

「000000号は能力が強いので成功する確率が高いですが、他の研究所は警備員に捕まる可能性が高いです、とミサカは妹達を見捨

てる00000号の非情さに感心します」

「そもそも逃走後の計画が不明瞭です。戸籍も無しに生活は出来ません、とミサカは計画の無謀さを指摘します」

フルボッコである。妹達は手加減を知りませんね。お姉ちゃん悲しいです。

その日、俺は枕を涙で濡らした。

計画凍結になると、研究所は機密保持のため閉鎖される。しかし研究に使われた器材の片付けや資料の整理があるので、すぐには閉鎖されなかった。片付け作業には俺や妹達も狩り出された。

だがそれも長続きはしない。次の研究が決まり研究所をあとにする者も増え、次第に研究所は閑散となっていた。

ミサカネットワークで所在のわかる妹達も徐々に確認が取れなくなっていた。閉鎖中は次の研究が決まるまで全ての妹達は培養器に保管されるせいだ。もう今は二桁をきっている。うち五人はこの研究所の妹達だから、もう他の研究所もほとんど閉鎖したのだろう。

今日は砥信さんが研究所を去る。……もう会えなくなるかもしれないから、最後くらい仲直りして別れよう。

「砥信さん」

声をかけると、彼女が振り返る。ちゃんと顔を見るのはいつ以来だろうか。

「お疲れ様でした。色々お世話になりました」

ぺこりとお辞儀する。最後まで礼儀正しくいこう。始めの頃は目上だから敬語にしろと言われたが、天井ですら敬語じゃなかったのが彼女が折れたのもいい思い出だ。

「……………」

彼女はなにも答えない。

「じゃあ、さようなら」

その場をあとにしようとした時、

「待ちなさい」

砥信さんが呼び止めた。

「私は今でも妹達は感情がないと思っているわ」

——息がつまる。

「however」

砥信さんは少し微笑んで

「いつか感情が芽生えると思うわ」

そう言ってくれた。

「どんな研究になるかわからない、nevertheless、必ずまた会いましょう」

もちろん俺の返事は笑顔で

—— ああ、またな。

培養器に入る。保存液に浸かるまで妹達と話した。今度起きる時までにやりたい事見つけるとか、本当に取り留めのない話だ。保存液が満たされていく。徐々に意識が保てなくなる。

今度起きる時は砥信さんが妹達を人として……見てくれる。妹達も……きっと感情が芽生えて……人として……生きるだろう……。次起きる時は……きっと……幸せに……。

第十話（後書き）

とある科学の完全調整・完

次回の00000号先生の活躍にご期待下さい！

いやもうちょっとだけ続くんですけどね。

第十一話

研究所の一室。一人の男が黙々とキーボードを叩く。

部屋の主が神経質な性格の為か、膨大な書類があるにも関わらず、机上は整然としている。その書類に目を通しながら、ただひたすらにキーボードを叩いていた。無機質だがやけに規則正しい音が部屋に響く。入力を終えたのか音が止み、男——天井亜雄はモニターに視線を移す。

そこには「超能力進化（レベル5シフト）実験計画書」と表示されていた。

量産型能力者計画が凍結して早一ヶ月が過ぎた。

非公式な実験ではあったが、学園都市の一部の科学者では非常に注目された研究内容だった。結果は失敗だったが、クローン技術の確立、そして妹達と成果物もある。

そのため計画を再利用できないか様々な検討がなされた。そして二つのプランを実施することが決定した。

その中のプランの一つ。それが「超能力進化実験」である。

内容は決して公表できるような代物ではない。しかしこれらのプラ

ンが成功すれば、量産型能力者計画など及びもしない名声を得られるだろう。

だが、今回は前回のような失敗を重ねる訳にはいかない。そうなれば学園都市での研究者としての地位は失われる可能性が高い。

計画に穴がないかどうか確認するため、何度も何度もモニターに目を通す。

前回の計画は、妹達が欠陥品であると特定されるまでに、時間がかかってしまった。計画の事前に樹系図の設計者が使えば早期に計画の失敗がわかったかもしれない。しかし妹達の実測した能力データが無ければ、そもそも樹系図の設計者が演算できなかったのである。

だが、今回は違う。前回の結果を元にして、事前に樹系図の設計者の予測演算も行っているプランだ。実験が失敗するはずがない。

勿論、だからと言って対策を取らないわけではないが……。天井は前回の計画から非常に慎重になっていた。もう後がないのだからこそ、万全を期す。

夢を見ていた。憑依する前の子供の頃の夢。

当時小学生だった俺は、この頃は余り人と話すのが得意じゃなかった。それが特別親しい友達なんていなかった。それが災いしたのだ

ろう。つかず離れずいた距離が次第に離れていく級友。いじめに発展するのはその距離が無視できないほど広がっている——そう自覚した時だった。

最初はいわゆるからかいの対象だった。次第にエスカレートし、所謂いじめのテンプレートな展開で物が無くなる、暴力は振るわれる、距離を置かれる、陰口を聞こえよがしに叩かれるだ。そして最終段階はいなかったことにされる——存在を否定された。級友や担任からすら。

早い時点で親に相談していたらよかったのかもしれない。だが、それより先に心が折れてしまったら、反抗する意志すら無くなってしまったらあとはされるがままだ。まずいじめる側は、反抗する意志を潰しにかかる。

子供が考えつく、できる対応なんてたかが知れている。親に話すか先生に相談するかだ。親に話そうとすれば暴力で脅され、担任はいじめが存在すれば責任を負わされるため、見て見ぬフリをする。休み続けるには、転校するには親に理由を言わなければならない。どんどん追い詰められていく。周りから無視され、自分は無価値で生きるべきではなんじゃないかと思っただけだった。

幸い俺は他の教師がいじめに気づき、親が助けてくれ、そのまま転校となった。

さらに幸運なことに次の学校で友達ができ、親と友達に支えられたから立ち直ることができた。

あの頃の自分と妹達はある意味似ている。周りから人扱いされないところ、計画が凍結し、実験体の立場がなくなっただけで処分されても構わないと自身の価値を蔑ろにしているところとか。だから彼女達をなんとか変えたいのかもしれない。あの頃助けてくれた人達のように。

だから変えるんだ。

少し光を感じる。次第に眩しく感じて意識が覚める。どうやら培養器の中だ。……………処分はされなかったらしい。

培養器の扉が開き、表にでる。ニヤニヤと笑う白衣の男。培養器は保護液で満たされていたので当然俺は裸。

ああ、なんか凄い既視感。取り合えず一回殺つとく？

「また私に電撃を放つとは！相変わらずお前は変わらないな！！」

「いやさ、少女が裸でいてさ、目の前にニヤニヤしてる男がいてみ？どうみても変質者だって」

想像したのか天井は顔が引き攣った。まあ気絶するほどやらないように手加減したから勘弁してくれ。

「で、俺を起こしたってことは新しい実験が決まったってことだよな。妹達も実験に参加するのか？」

手加減した理由はいいつに事情を聞きたためだ。引き攣ってた顔が綻ぶ。よくぞ聞いてくれたって表情だな。わかりやすいぞ。

「ああ。超能力者進化実験という実験だ。妹達も使ってたな」

「聞く限りでは、能力をレベル5に進化させる実験みたいだが……、俺達は進化できないんじゃないのか？もしかして、寝ている間に進化できる技術でも出来たのか？」

そう、進化できないからこそ以前の計画は失敗したんだ。もし進化できるなら、その前提が崩れることになる。

「流石に計画が凍結してまだ一ヶ月しか経っていない。新技術はまだ確立されていないさ」

じゃあどういことだ？進化する方法が思いつかない。理解できていない顔に天井は心底満足そうだ。いるよな、こういう奴。

「進化させるのはお前だ。樹系図の設計者はお前のみレベル5に進化可能と演算しただろう」

「いや、たしかにそうだが寿命が10年しかないんだろ？仮に寿命を延ばしても、実験に15年もかけられるのか？」

「そこで妹達を使う」

妹達？なんでここで出てくる？

「まだわからないか？ミサカネットワークだよ。ミサカネットワークを使って、レベル5が受けたカリキュラムを妹達にも受けさせる。そしてその経験をお前に共有させたらどうなる？」

……！なるほど！ネットワークで経験値を積むのか。たしかに時間を大幅に短縮できるかもしれない。だが……。

「それでも、50人じゃ時間はかかるんじゃないか？寿命までには届きそうだけど。単純にカリキュラムを分割しても50人じゃ……

……」

「20000だ」

は？

「20000の妹達を使って、お前を進化させる。それが超能力進化実験の実体だ」

な、
なんだって――!!??
???

第十二話

な、なんだって——！！！？？？

20000人の妹達に経験を積んでもらい、ミサカネットワークからその経験を共有、経験を蓄積し、00000号をレベル5に進化させる——超能力進化実験というトンデモ計画に思わず叫び声をあげた。

なにその「時間が無ければ人を増やせばいいじゃない」な発想は！
いいのか？そんな強引なパワーレベリングは！

一瞬、某忍者漫画の影分身での修業風景とか、とある馬車の武器商人が馬車の中にいるだけでレベルがカスタした風景が頭を過ぎった。

ああそういえば忍者漫画で某上忍は雷技使ってたな。あれ今度真似しよう。……………じゃなくて。

「キバヤ……………天井、しかしそんな無茶苦茶な実験は本当にできるのか？それに20000人は予算的に大丈夫なのか？」

とかく研究にはお金がかかるのだ。妹達一人を生み出すのに18万円かかり、さらに衣食住にもお金はかかる。20000人ともなると1日だけでも相当な額になるだろう。さらに研究所の維持、科学者や警備などの人件費など雑費も考えると想像もつかない。

「ああ。今回は樹系図の設計者で事前に演算したからな、間違いないはずだ。統括理事会の承認を得て、予算も十分にあるさ」

成る程、樹系図の設計者で演算された結果は確定事項のようなものだ。だから上層部も一度は失敗した計画の再利用を決定できたのか。天井の顔も自信に満ち溢れているな。

もし、この実験がまた非人道的な実験だったら、流石に抵抗するつもりだった。しかし聞く限りでは命を失ったり、軍事利用される内容ではない。流石に19950人もの妹達を実験の為に新たに生み出すのは気にかかるが。

だが生活するとなると、実験を受けるしかない。新たに生を受ける彼女達と一緒に。前の実験ではできなかった妹達の感情を芽生えさせ、周りから人して扱ってもらって目標もやりたいしな。

憑依する前だったら、クローンに漠然とした忌避感があったが、今は違う。どうやって生まれたかは選べようがないものだ。むしろこれからどう生きるかが問題なのだ。

だから実験を受けることにした。

「そう言えば、砥信さん………布束さんはこの実験に参加しているのか？」

砥信さんとの約束。できれば叶うといいんだが。

「残念だが、彼女はこの研究には参加していない。そのかわり優秀なスタッフはたくさんいるがね」

そう……か。まあいつか会えるだろう。約束したもんな。

「ああそれから、00000号、これを渡しておこう」

ややゴツイゴーグルを渡される。なんだこれ？視力はやたらいいほうで視力矯正は必要ないんだが。

「これは電磁波を視覚化できるゴーグルだ。以前、お前がオリジナルの能力との差異について指摘しただろう。進化するまではそれでスペックを補う」

研究のための新装備！そういうのもあるのか！電磁波見れるようになったら、また能力が増えるかな？うーん、一度考えんとなあ。

「それからお前は、こちらが指示したカリキュラムを行ってもらう。ミサカネットを使つてはあげられない肉体的な刺激、薬物投与などのカリキュラムを優先するがな。その間に二万の検体を造りだす」

——そして実験は始まった。

まず手始めに行ったことは、既に覚醒済みの妹達のカリキュラムを受けさせ、俺自身がどのくらい成長できるのかの確認だった。

樹系図の設計者が演算したとはいえ、経験を共有し、成長できるかは実際に目にしないと安心できないしな。

隣にいる3号と他の研究所にいる36号がカリキュラムを受けるみたいだ。

カリキュラムは薬品の投与や電極による刺激を与えるようなもの、それからひたすら反復作業を行うものもある。例えば透視能力のカリキュラムなんかは目隠ししてポーカーに10連続勝利するというふざけたものもあるくらいだ。

今回やるのは後者の反復作業にあたるカリキュラムで、ひたすら計測器に一定の電撃を流し続けるというものだ。一定量の電撃を流すことで電撃の制御能力の向上、持久力の向上を目的としたもので電撃使いには基本的なカリキュラムである。しかし地味だが、電撃使いは電池切れという制限があるので長時間できないという問題もある。だが二万の妹達が交代でやれば24時間できるかもしれないな。

（じゃよろしくな、3号、36号）

（わかりました、00000号とミサカは返答します）

どうやらネットワーク上で経験の共有が始まったようだ。視覚的な情報——所謂3号や36号が見ているものも見ることができ、今回は見ずにあくまで制御に関する情報のみ共有する。基本的にこのカリキュラムは見ることに意味はないしな。

結果はカリキュラム前と後で身体検査してみると成長している数値が出た。しかし同じカリキュラムを受けた成長率を考えると本当に微々たるものだが。まあそれを数で埋めるようにするんだろうけど。

今の状況だと某有名RPGでいえば、スライムから得る経験値だけでギ。デイン覚えようとしてるようなもんだからなあ。

…………… 本当にこの計画うまくいくんだろうか？

第十三話

いつもの自分の部屋。一ヶ月放置された部屋だが清掃用のロボットが掃除をしたらしく、塵ひとつない。1号たち妹達を呼んで今回の実験に関して聞いてみた。

「本来カリキュラムを受ける場合、被験者の能力に合わせて行われます。例えば今回の場合、00000号はレベル4相当の電撃を制御しますが、3号や36号はレベル3相当の電撃の制御しかできません。仮に00000号がレベル3相当でカリキュラムを行った場合、樹形図の設計者が導き出した演算結果より大幅な期間の増加が想定されます、とミサカは説明します」

「だから被験者である00000号がカリキュラムをこなすのと、妹達がカリキュラムをこなすのでは大幅に成長率に差が出るのです、とミサカは断言します」

例えば腕立て伏せを200回以上こなせる人が日々200回やるのと、20回やるのでは筋肉の付き方に差が出るようなものか。

「そっか、じゃあ樹形図の設計者の計算だと1年で進化するってのは、その成長効率を踏まえた上での結果というわけか」

「そうなります」

成長率が低いので、カリキュラムだけじゃとても足りないのではと思ったが、そうでもないんだな。

「じゃあ実験自体は一年で終了するのか。一年後はやっぱり他の実

験に参加させられるのかね？」

やっぱり他の実験や研究に参加するんだろっか？

「……………」

「あれ、なんでみんな黙り込むわけ？」

「なんでもありません。それよりいつもの食事はまだですかとミサ力は要求します」

「いや流石に食材きれてるから明日な」

さすがに食材がないとお手上げである。今回も外出許可は取れるのかね？

「そうですか、とミサ力は嘆息します」

「ん？どうした？」

「他の妹達と情報の共有を行った際、食事について確認してみたのですが、錠剤や点滴で済ませているようです、とミサ力は驚愕の情報に愕然としました」

「錠剤がどんな味か味覚を共有したのですが、余りのまずさに000号の手料理が如何に美味しいかと理解しました、とミサ力は食事の重要度を上方修正しました」

そっか。1号達は最初から俺が食事だしていたけど、他の妹達はそ

うなのか。俺が最初に貰ったブロック食はまだまともなほうなんだな。

「それで他の妹達が000000号の手料理に興味を示して何度か実験の共有を行っています、とミサカは現状を報告します」

「今では新たな食事が出た際、即時情報公開を要求される状況です、とミサカは現状の補足説明をします」

……もしかすると錠剤飲みながら、手料理の情報を共有して味をごまかしてたりするんだろうか？ 侘しい食事風景を想像して哀しくなった。これはひどい。……妹達の食糧事情はなかなか深刻な問題のようだ。

「食事に関しては、000000号グッジョブです、とミサカは惜しめない称賛を贈ります」

……珍しく褒められた。仕方ないなあ、明日はご馳走作ろうかな！

（これだから000000号はチョロいです、とミサカはさりげなく呟きます）

実験が始まって十日が過ぎた。外出の許可は降りた。今回の実験は研修として妹達も外出することがあるらしい。

ちなみに外出時の服装は常盤台中学校の制服である。常盤台中学とは学園都市でも有数のお嬢様学校で、優秀な能力者が多数在籍して

いる。オリジナルもそこに通っているらしい。

何故この制服なのかというと、万が一オリジナルの知り合いに遭遇した際にごまかすためだ。（オリジナルにより近付けるという意味もあるらしいが）最初聞いた時は、返って知り合いに会うとごまかしきれないような気がするんだが。どうやら常盤台はお嬢様学校なだけあって、校則が厳しいらしく外出時は制服でなければならぬのである。だから私服で見つかれば、返って大事になりオリジナルに連絡が入りやすくなる。

まあなんだかんで知り合いに遭遇することはなかった。二、三度同じ制服の如何にもお嬢様な娘と遭遇したが、知り合いではないように話しかけては来なかった。……まさか文武両道な完璧超人であるオリジナルがぼっちだから話し掛けられないことはないだろうが。

学園都市は広いのだ。そう知り合いやましてやオリジナルなんて会うわけがない。

話が代わるが、学園都市は治安が悪いようだ。治安維持のために学生で構成されている風紀委員と教員で構成されている警備員という組織がある。
ジャッジメント
アンチスキル

最も風紀委員は学生のためか危険度の低いどちらかと言うと交番お

巡りさんのような役回りで、警備員は危険度が高く、直接超能力者を取り押さえる役のようだ。

この間見たのは、風紀委員の子だろう。まだ小学生ぐらいの子供だったが郵便局で強盗があり、その強盗と交戦したらしい。能力者の戦いは凄まじかったのか、その子は足をやられ、シャツターごとなにかで貫かれたような跡まであった。

やはり超能力を悪用するやつらはいららしい。専任の治安維持機構が必要ではないか？是非妹達による治安維持を検討して欲しいところだ。1年後の就職先には調度いい。2万人の数は伊達じゃない！

そんなことを考えながらスーパーに向かっていた。ああ、早く行かないきゃ。しかしやっぱり外はいい。研究所は広いが外の景色が見られないからな。

——！あれなんか今妙な感覚が体を突き抜けた。あれはなんだ？

「待ちなさい！」

不意に背後から声をかけられる。

「あんた…、何者？」

振り返れば、今学園都市で一番会ってはいけない人がそこにいた。

第十四話

振り返ればそこには今一番会ってはいけない人——御坂美琴がそこにいた。

御坂美琴——常盤台中学1年ながら7人しかいないレベル5の第三位で、超電磁砲の異名を持つ最強の電撃使い。そして俺や妹達の素となったオ리지ナル。

……いやあ世間は狭いですね。……ってどうすんのオ！ヤバいやバいやバい！！相手めっちゃ睨んでるし！！！！

「……………えーつとですね、あなたのお母さんのお姉さんの旦那さんの従姉妹の娘なんですけど、カエツティイデス力？」

「そんなこと信じられるわけないでしょ。それとも答えられない？なら痛い目にあってもいい？力づくで聞いてもいいのよ」

こちらを威嚇するようにバチバチと彼女の身体から放電による火花が散った。オ리지ナルはめっちゃ好戦的である。お嬢様ではない。お嬢様（笑）だ、これ。

逃げるのは無理そうだ。ここは覚悟を決めよう。

「わかった。とりあえず場所を変えよう。ただ先に用事を済ませてもいいか？」

「ええ、いいわよ」

「わかった。ついて来てくれ」

御坂美琴は憂鬱だった。とある悩みを抱えていた。事は1ヶ月以上前に遡る。それはとある噂が流れたからだ。

超電磁砲のDNAを素にしたクローンが製造されている——という噂だ。軍事利用を目的としており実用化されてそうだというのだ。最初は根も葉も無い噂だと思っていた。だがしかし完全に否定することできない。何故なら否定できないだけの理由もあったから。

筋ジストロフィー症——筋萎縮と筋力低下が進行していく遺伝性筋疾患——現代医学では治療法が無い。

脳の命令は電気信号で送られる。もし生体電気を操れば、通常の神経ルートを使わずに筋肉を動かせるのではないか——つまり電撃使いのDNAマップを解析し、生体電気を操る術を植え付けることで筋ジストロフィー症を克服することができるのではないか。

そう考えた科学者は電撃使いである当時幼かった御坂美琴にDNAマップの提供を求めた。筋ジストロフィー症を目の当たりにした美琴はもちろん快く提供に応じた。——それが最善であると信じて。

その提供したDNAマップがクローンの製造に関わっているのではないかと懸念しているのである。

そしてその信憑性を高めるかのように、普段と異なった超電磁砲の目撃情報がちらほら流れて来るようになった。

曰く、大量のレジ袋を抱えて歩く超電磁砲を見かけたとか。

曰く、スーパーで特番していた卵を見て「二人じゃないと安くならないのか……」と値札を睨んでいた超電磁砲を見かけたとか。

曰く、特売品を抱えて小躍りする超電磁砲を見かけたとか。

曰く、子供ばい服を手に悩んでいる超電磁砲を見たとか。

最初それを聞いた時は思わずどこの主婦かつ？！と思った。――
最も最後の噂は当人なのだが。

ネットでは多額の研究費もらっている割にケチ臭いとか、意外と苦学生なんじゃないかという本人説と、普段の本人から掛け離れた姿に以前から噂されているクローンじゃないかという説が流れていた。

直接真偽を確かめにくる者はいなかったが、周囲の噂やネットの情報をもとめるとあまりに具体的な目撃情報と自身に身に覚えが無い事なので、クローンの噂は信憑性が高いのではと思ったのだ。

それで目撃情報のあつた地域を散策していたのである。すると自分と同じような力の放射を感じた。気になり追いかけてみると、そこには自分とური二つの少女がいた。

クローンは実在したのだ！衝撃が全身を突き抜けた。襲い掛かってくるのは、クローンに対する生理的な嫌悪。造りだした科学者達への憎悪。——そして罪悪感。

複雑な感情が入り混じったがすぐに切り替えた。もし軍事利用でクローンを造りだしているというなら、計画を頓挫させてやる——そう考えクローンの少女を問い詰めた。

少女は抵抗する気は無いのか、諦めたのか用事を済ませたら事情を話すようだ。

用事——それはスーパーでの買い物だった。ああ、噂はここまで本当だったんだ——先程までの緊張が一気に霧散した。

卵お一人様100円が2パック買えた！着いてきたオリジナルのおかげだ。当の本人は、なんかさつきと違って凄い脱力してるけど。今は近くの公園のベンチにいる。

「んじゃまあ、どこから話そうか、オリジナル」

「………… オリジナルってことはやっぱりあんた、私のクローンなの？」

「ああ、検体番号0号、一番最初に生まれたクローンで、ミサカ0000号と呼ばれている。ま、00000号って呼んでくれ」

「最初？ちょ…ちょっと、まさかアンタみたいなのが五人も十人もいるんじゃないでしょうね？」

「ああ、今は俺を含めて五十一人だ。今後の計画で二万人に増える予定だ。みんなまとめて妹達って呼ばれている」

超能力者進化実験で新たに生み出された妹達はまだいない。生み出すには培養器で十四日かかるし、洗脳装置による強制入力もある。最も洗脳装置にかかる時間は今までのように都度調整する必要がないので数時間で済むそうだが。

やっぱり、気味が悪いんだろうな。オリジナルの顔が青ざめている。憑依前なら自分でもそうなるかもしれない。

「……………何のために造られたわけ？」

「元は量産能力者計画というクローンを軍事利用するために生み出された」

「……………！どこのどいつが計画を主導してるの…！」

「現場を仕切ってるのは天井だと思うけど、どうだろうなあ？学園

都市の上層部も関わってるみたいだし。それにその計画自体は失敗で凍結しちゃったし」

「な……………！？え……………？」

「生み出さた妹達や俺はレベル5に進化できないってことがわかって、量産型能力者計画は取りやめたんだ」

「じゃあアンタはなんでここに居るの？それにさっきの話と矛盾するじゃない」

超能力者進化実験のことを話す。妹達二万人の経験の蓄積とネットワークで経験の共有によって、寿命のせいでレベル5になれない俺をレベル5に進化させる方法を。

「まあそんなわけで二万人を生み出すことになったんだ」

「……………」

「……………オリジナルからすれば、俺達の存在は受け入れられないのかもしれない。こんなバカげた計画を止めたいかもしれない」

「生まれてきた俺達は実験がないと廃棄処分になるかもしれない。けど少なくとも俺がレベル5になるまではこの実験内容なら処分されることはないだろう」

だから。

「その間に妹達に感情を芽生えさせて、実験してる奴らに妹達を人

間として認識してもらおう。そうすれば簡単に殺そうとは思わなくなるはずだ」

オリジナルの目を見る。

「だから俺達に生きるチャンスをくれないか？頼む」

そう言っ
て俺は深く頭を下げた。

第十四話（後書き）

00000号が量産型能力者計画で買い出ししている姿を見られたために、クローンの噂がかなり早い時点で出回っています。

第十五話

顔を上げられない。オリジナルはどう思ったか不安だ。勢いで言ったけど、失敗したか？心臓がバクバクいつてる。

「……………とりあえず頭あげなさい」

顔を上げ、オリジナルを見る。腕を組んで険しい顔をしているな。

「アンタの言い分はわかったわ。けど具体的にはなにをするつもり？」

「うつ……………」

感情が芽生える方法か。基本的には見守ることしかしなかった。色々な経験を経て成長するのだから、いつかは時間が解決してくれるかもしれない。だが、限られた時間がある以上何らかのきっかけは考えなければならぬだろう。少なくともオリジナルは納得しまい。

実の所全く考えがないわけではない。一つは自身の感情をミサカネツトワークで共有できないかというものだった。しかし感情データがどういうものなのか、わからない限り共有することが不可能だ。

もう一つは洗脳装置を使った感情の入力である。一人にでも感情が入力できれば、あとはネットワークで共有できるかもしれない。し

かしこれは感情はどういったデータかわからない問題に加え、洗脳装置を使うには専門家が必要だ。

洗脳装置の専門家——一人だけ心当たりがあるが。

「本来、感情は自発的に芽生えないといけないと思う。けどきつかけになるものなら、一つだけ思い当たる方法がある」

「その方法は？」

「妹達は肉体や人格を速成させるために色んな技術を使ってる。その中で知識や人格なんかは洗脳装置って呼ばれる機械で脳情報を入力して調整しているんだ。だから、それを使って擬似的な感情を入力すれば、本来の感情の芽生えを誘発できるかもしれない。……最も感情を入力できるのかどうかはわからないけど。けれど洗脳装置を監修した人なら可能かもしれない」

それでも、それでも砥信さんならやってくれる………！

「布束砥信。彼女を見つけ出す」

しかし砥信さんを探すとすると大変だな。どうしよう。

「そう、わかったわ。じゃあ私がその人は探すわ」

「外出してる時間に限りがあるし、それは助かるが、いいのか？」

「ええ、元と言えば私のDNAが原因だしね。勝手に使われているのじゃくだし、自分で撒いた種だもの。自分の手で片を付けるわ」

まさか協力してくれるとは。

「オリジナル……………お前結構いい奴なんだな……………」

「なっ、ちっ違うわよ！ただでさえ、勝手にクローン造られたから研究を止めたいだけよ！！……………っ、アンタその温かい目はやめなさい！！！」

照れだろうか、電撃を放出するオリジナル。オリジナルの優しさはビリビリだ。

「なんかアンタといると、たまに疲れるわ……………。というか、アンタ本当にクローンなの？話を聞く限りだとクローンは感情ないんですよ」

「とある人格が憑依して感情が宿ったんだ」

「……………笑えない冗談ね。どこの漫画の設定よ」

「ですよー。まあ普通は信じられないよな。」

「まあ原因はよくわからないんだわ。他の妹達と違ってレベル5に

進化できるみたいだし、まあ気にするなオリジナル」

「他の妹達がアンタと同じでなくてよかったわ。あとオリジナルって呼ぶのはやめなさい、御坂美琴って名前があるんだから」

んー気になるか。じゃあ。

「じゃあお姉様で」

憑依前からすればずっと年下の子だけど。

「はあ？」

「いや他の妹達はお姉様って、呼んでるんだ。見た目みて姉妹に見えるしいんじゃないか、お姉様」

「……………はあ、まあいいわ」

納得はいつてないようだが、諦めたようだな。

「時間も危ないし、そろそろ帰るわ。定期的にこの辺に買い物にくるから、もし布束さんを見つけたら教えてくれ、じゃまたなーお姉様！」

そういつて遠ざかっていくクローンの少女を美琴は見送った。

クローンとは思えないような表情豊かな少女――。

彼女は、ただクローンとして造り出された自分達の生を欲した。純粹な生の渴望。普通の人より、より人間らしいと感じた。

クローン製造の計画は止めたい。だが彼女の生きるチャンスは潰したくはない。

少女の言っていることに嘘は感じなかった。しかし、研究自体には疑問があった。

量産に失敗したクローンをレベル5に進化させて何に利用するのか？

たしかにレベル5は貴重だ。しかし、自分のクローンが同じ能力なら、自分は様々な研究に協力しているので、十分なデータがあるはずである。新たな研究を興すような話は聞いていない。軍事利用は凍結したから違っだろう。

本来研究は何らかの目的があって行われるはずだ。それが不明瞭なのである。

それが何かはわからない。理解するには情報が少な過ぎる。

彼女から聞いた情報――量産型能力者計画、科学者・天井、妹達、超能力者進化実験、そして布束砥信。これらがキーワードだ。

幸い発電能力者である自分はネットワークから様々な情報をハッキングして入手できる。まずは情報収集が必要だ。

――絶対に妹達を命を奪わせない。

超電磁砲が今学園都市の闇に立ち向かう――。

第十六話

なんか主人公が途中で変わったような気がする000000号です。

現在、正座中です。周りには妹達がいいます。

「買い物でお姉様に遭遇するとは迂闊です、とミサカは000000号を叱責します」

えーと、なんでバレてるんでしょうか？

「ミサカネットワークからお姉様と遭遇したことはリアルタイムで情報を得ています、とミサカはネタバレします」

……………まさかストーキングされてます？

「しかしお姉様に知られた所で実験の障害にはならないのではないのでしょうか、とミサカは疑問を提起します」

話を逸らされた気もするけど、確かに協力してくれる話になったかな。本来ならなじられても、実験を止められても文句は言えない。初対面でしかもクローンが一方的にお願いしたけど、文句一つ言わなかったし。お姉様はいい人だよな。

「確かに実験を止めるとなると一個人でできる事は高が知れていまず。妨害されたとしても、前の計画のように計画の前提が破綻でもない限り、実験は継続するため障害にはならないでしょう、とミサカは判断します」

破綻ねえ。この実験だと俺がいなくなっちゃえば止まりそうだけど、その時点で妹達に死亡フラグが立ちそうだからな。それは一番出来ない。むしろ時間稼ぎはしたいんだが。

「所で00000号。お姉様との会話の中で、私達に感情を芽生えさせる話をしていましたが本気ですか、とミサカは問います」

会話もバツチリ盗聴されているんですね。

「本気だぞ。前も言ったけど、俺達は人と大差無いはずだ。だからきつと感情だつてある。クローンだからって自分を卑下しなくてもいいんだ。人扱いされないで廃棄処分されていいなんてことはない」

「妹達は計画の為に造られた模造品です。作り物の体に借り物の心。人扱いされないのも計画が無ければ廃棄されるのも当然です」

「体はそうかもしれないが心はそうなんかじゃないさ、お前達は」

俺は今まで過ごして知っている。皆同じ姿だが、表に感情を出せないがそれぞれ違う個があることを。

「外の事が気になって仕方ない1号、甘いもの好き2号、一番手伝ってくれる3号、綺麗好き4号、みんなに虐められると助けてくれる5号……他の妹達はあつてないからわからないけれど、けど全く同じ妹達はいないはずだ。だからお前達がいなくなったら、お前達の代わりはいない。いなくなったら俺が悲しいぞ」

「悲しい———ですか」

「どうして00000号はそこまで私達を気にするのですか」

昔の自分を見てるようで助けたいってのもあるけど、これは言いづらいな。

「まあ、俺はお前達のお姉ちゃんだからな。妹達を気にして当然だ」
「……………」

あれー返事ないんですけど。ひょっとして外したかな？

ミサカ1号は考える。000000号の事を。思えば初めて会ったときから、何処か変わった個体だった。

妹達は感情がない。その筈なのに、他の人間と遜色ないイレギュラーな000000号。ネットワークや洗脳装置で知っていなければ、人間だと認識したはずだ。

感情の入力や調整をされたわけでもなく、持つて生まれた感情で動く000000号は妹達の間でも興味が尽きない。布束という科学者は特に興味を持ち影響を受けたのではないか。

彼女は000000号と比べると、余り表情を変えないからむしろ妹達に近い印象だ。だが000000号と一時期距離を置いていた時は、やや落ち込んでるように見えた。

そして自分達も少しずつではあるが000000号に影響を受け始め

ている。

一番は食だろうか。食への興味はあったが、さほど重要なことではなかった。00000号の手料理は決して知識にある一流の調理法で作られたものではない。だが美味しい。妹達の間で料理の情報のやり取りが行われるくらいだ。もしかすると他の妹達は羨んでいるのかもしれない。そういった点では自分達は恵まれているだろう。

00000号は自分達を、そして周りの環境を変えようとしている。クローンと人間の違いはないと訴え、感情を芽生えさせて人とは違うわないと証明させたがっている。人として生きる為に。

だが自分達はクローンだ。感情があったところでそれは変わるとは思えないし、いつかは処分されるだろう。例え処分されようと代わりのきくものだ。

——しかし。

——00000号が処分されたら。彼女と同じ個体は生まれるだろうか？

どうして感情を持った妹達ができたのかわからない以上、それは不可能だ。そう考えると理解不能なノイズが走る。それがどうしてものかよくわからない。

「…………あのそろそろ勘弁してもらってもいいでしょうか？足が痺れて痛いんですけど」

未だに正座をしている自称姉は若干涙目だ。

「……………出来ない姉を持つと妹は大変です、とミサカは嘆息します」

00000号——本当に不思議な个体だ。

第十七話

お姉様と会った事はどうやら黙っていてくれるらしい。聞かれたら答えるが聞かれなかったら答えないというスタンスだ。まあ口頭で注意された訳でもないしな。怒られ損な気もするが確かに結果オライとは言え注意不足だ。深く反省せねば。

そんなこんなで一ヶ月過ぎた。もうすぐクリスマスと年越しらしい。お姉様には残念ながら会えないでいる。実験のスケジュールが優先だから外出時間がどうしてもバラつくからかもしれない。砥信さんとは会えたんだろうか？

妹達は順調に数を増やしている。この研究所でも既に1000人を越えた。全体でみると月に約2000人くらいのペースだ。人口受精卵から促成したとしても二週間かかるので、妹達の増員にも限界はある。しかしこのペースだと二万人揃えるだけで、十ヶ月はかかるはずだが間に合うのか？実験は一年だったはず。だが天井が言うにはスケジュール通りらしい。

妙な違和感を感じつつも、日々は過ぎていく。そして何の予兆もなく事件が起きた。

——サイバーテロによる複数の研究所の破壊工作。それは妹達や実験に関わる研究所のみ起きた。

突然機器が壊れたり、火災が発生し炎上したものの、不幸中の幸いか研究員や妹達に被害は無い。しかし機器やデータは全壊、二十ある施設が十六基も壊れてしまったため、全壊してしまった機器の代わりを揃えること、他の研究所への移送作業で実験が若干遅延するようだ。

関連施設からの襲撃から見て犯人は明らかにこの実験を狙っている。その為残りの研究所は電氣的な外部の通信を一切遮断した。

犯人は今のところ捕まるどころかわかってもない。ただ学園都市には様々な研究グループが存在し、似たような研究を行っていると妨害工作してくることもあるそうだ。なのでその一部の犯行かもしれない。正々堂々と研究で勝負すればいいのには思うが、限られた予算や期限によっては強行手段を取ってもおかしくはないそうだし、にしてもクローンを使った似たような実験は他にもあるのかと辟易した。

こちらとしてはスケジュールの遅延は内心ありがたい限りではあるが、スケジュールの唐突な変更は研究者達を困らせている。他の研究所では妹達の手も借りてるぐらいだ。

残る研究所は四基。サイバーテロは出来ないから、もしかすると直接襲撃されるかもしれない——なんてな。なんだかんだでここはセキュリティが高い。訓練でここのセキュリティのハッキングをやるうとしたけど複雑過ぎて電子ロックの扉を開けるので精一杯だった。レベル4でこれなら、例えば能力者でもそう簡単に内部には侵入されないだろう。それに研究の遅延目的なら充分成功してるしな。襲撃なんて起こらないだろう。

——そう思ってた自分が馬鹿でした！この世界が俺に優しくない世界だって、死亡フラグ満載の世界だって忘れてた！

モクモクと充満する煙、時折爆発音が聞こえて来る。どうやら襲撃されたようです、本当にありがとうございます。

サイバーテロではたまたま被害がなかったが、いつこちらに被害が来るかわからない。百人を超える妹達とともに消火作業にあたる。施設自体にも消火装置があるはずなのだが、電子機器が異常を起こして動作してないからだ。

こういう時、ミサカネットワークは便利だ。ネットワークを駆使して研究所内の見取り図を共有、被害が出ている場所に妹達を迅速かつ効率よく割り振る。増員が必要ならばすぐに連絡が来るし、作業が終われば次の仕事の割り振りも即時行われる。レスキューミサカでもやっていけるかもしれないな。

消火作業に当たっていると、もの凄い音が響いてきた。あれは何処かで聞き覚えがある……あれは雷撃の槍の音だ！もしかすると侵入者かもしれない。となると侵入者は発電能力者か！サイバーテロも能力者の犯行が疑われていた。同一犯の可能性が高い。

息を殺して音のするほうを見遣る。一室から出てきた奴は深々と帽子を被っていて誰かはわからないが、体格からして俺達に近いから少女だろう。

俺達のような少女の発電能力者——？まさか、そんな。

不意に以前とある時に感じた違和感が襲った。間違いない。あの人は彼女だ。

少女は事を終えたようで直ぐさまその場を跡にした。しかし俺はその場を動くことは出来なかった。

一体どういっつもりなんだ……………お姉様！？

第十八話

襲撃を受けたのはここだけでは無かったらしい。他の施設も同様に襲撃を受けた。残る研究所は二基。

俺といつもの五人を含む二十名の妹達はそのひとつの研究所にいる。襲撃を受ける可能性があり、緊急に移送しなければならなくなったのでその手伝いのためである。他の妹達も二十名ほど残りの研究所から実験を引き継ぐ新たな外部研究所への移送作業を行っている。

犯行手口はほぼ同じ。施設に直接侵入して機材及びデータの破壊活動を行った。死傷者はなし。セキュリティは悉く反応せず、警備員や研究者は警報を誤作動させて遠ざけていたので目撃者なし、監視カメラも襲撃者を捕らえる事ができなかった。このままでは実験の中止も有り得る状況だ。

唯一の目撃者である俺はその事を黙っている。やはり何故という疑問が尽きないからだ。

あの時お姉様は間違いなく実験は潰さないと約束してくれた。しかし今の状況はどちらかと言えば、実験を潰しにかかっている。これはどうということだ？

あの場では演技だったのだろうか？——いやそれならば妨害自体もっと早く行われてもおかしくはない。一ヶ月も待つ必要性はない筈だ。それ以上に演技のような気がしない。

となると、一ヶ月の間に心変わりするような事があったのか？

お姉様は砥信さんの探索を引き受けてくれた。もしかして砥信さんと会って何かを知ったのか？知ったから実験を妨害しにきた？やや飛躍しているし根拠もないが、それが一番しつくり来る。

だがその場合なにを知ったんだ？実験を潰すとなるとよほどの事だ。だがレベル5に進化させるだけの実験じゃ、潰す程の理由にならない。もしかして俺の知らない何かがあるのか？

くそ、わからん。妹達と相談したいけど、実験を妨害しそんな理由に関しては対立グループが研究の妨害をしているんじゃないかという話でまとまってたし、あまり詳しく話すとお姉様が襲撃犯とバレル可能性が高い。

あの時お姉様に聞ければよかったが、さすがに呼び止められなかったし。ああ、こんな時砥信さんがいればなあ。

研究所は慌ただしい状況だ。一晩で施設内の全研究データの移送をするのだから妹達の手も借りたいというわけだ。にしても膨大な資料の山だな。ジエ。ンニが欲しいね。

妹達を4人のグループに分け、それぞれが研究員の指示を受けながら膨大な研究データを搬送していく。一体何往復するんだろつか、これ？段ボールの箱の山を見ると妹達全員連れて来なくなるわー。

しばらく段ボール達に悪戦苦闘し、一段落した所で新たな指示を貰うため、研究員を捜す。みんな忙しそうで声かけづらいな。

研究室を一望できる階上のガラス張りの所にいる中年の研究員と若い女性が視界に入った。――！？あれは砥信さん！？なんでこんな所に？実験には参加していなかったはずだ。もしかして参加することになったんだろうか？

とにかく聞きたいことが沢山ある。会いに行かなきゃ！作業を放置して砥信さんのところへ向かう。

砥信さんはちょうど部屋から出てきた所だった。

「砥信さん！」

誰かに咎められたようにビクリと体を震わせ振り返る彼女――間違った、砥信さんだ。

「あなたは00000号？どうして此处に？」

「移送の手伝いでここに来ただけど、砥信さんを見かけたから、つい作業すっぱかしてきたんだ。久しぶり砥信さん」

「そう……however、これは好都合かもしれない」
好都合？どういう事だ。

「いい、ここから逃げ出さない。出来れば妹達を何人が連れて」

「逃げろって……もしかしてお姉様が研究所を襲撃してることと関係があるのか？」

「そう、そこまで知っているのね」

やはりお姉様と砥信さんは会っているようだ。襲撃も知っていると
なると共犯なのか？一体どうして？

「あなたは何も知らされていないようだけど、あなたが受けている
実験はとある実験の副産物に過ぎないわ」

レベル5に進化する実験が副産物？どういう事だ？レベル5は能力
者で最高位のはずだ。それが副産物だなんて。

「その計画は絶対能力進化（レベル6シフト）アクセラレーター実験——。学園都
市最強のレベル5である一方通行を絶対能力者（レベル6）に進化
させる計画よ」

え？最高はレベル5じゃなかったのか？疑問を口にする前に、砥信
さんは続きを言った。

「その計画は進化させるために——一方通行に20000通りの
環境で妹達を20000人殺害させるわ」

は、い——？

「あなたが関わっている実験はその計画が前提になっている。na

m e l y、20000人の妹達を犠牲にして、レベル6とレベル5
の能力者を生み出すつもりよ」

………なんだよ、それ。

第十九話（前書き）

一部修正しました。展開に変更はありません。

第十九話

世界はいつだって、こんな筈じゃない事ばかりだ——とあるアニメの台詞だ。現実には理不尽だ。誰しもがその現実の中で生きなければならぬ。思い通りにいくなんて殆どない。なるほど確かにその通りだ。

軍事利用で生み出されて、失敗したと分かれば欠陥品と蔑まれ、今度は実験動物として拾われたら、たった二人のための生け贄だと――。

――ふざけるな！そんなふざけた理由で妹達は二万人も虐殺されるのか！計画した奴らは気が狂ってる！

「詳しい説明がしたいけど時間が無いわ。a n y w a y、妹達と逃げなさい。その分計画が遅延するはずよ」

「わかった。砥信さんはどうするんだ？」

砥信さんがこんな狂気の実験をするとは思えない。なんなら一緒に逃げるべきだ。

「……………私は残るわ」

「どうして！？」

「私にはやる事がある。私にしかできない事が。だからあなたはあなたのすべき事をやりなさい」

彼女は覚悟を決めた顔だ。止める術はない。

「……………わかった。砥信さん……………必ずまた会おう！」

「ええ、また必ず」

振り返らずに妹達の元へ急ぐ。なんとか一緒に逃げるように説得しないと……………。

最後に00000号に会えてよかった——布束砥信は思う。

彼女がこの研究所にいるのは、とある研究グループから絶対能力進化実験に参加要請を請けたからだ。

急に呼ばれた理由の予想はつく。先方は妹達の調整実績から大掛かりな移送作業で不備が起きないか確認してほしいということで打診したそうだが、大方研究所を襲撃された時に責任をなすりつける気だろう。

これは御坂美琴と連携して行ったわけではないが、結果的にこの施設に潜り込むための布石となってくれた。しかも移送作業を優先し、外部への警戒が強くなっているため内部のセキュリティが甘くなっ

ている。

計画の内容を知り、計画を内部から妨害する為に準備をしてきた彼女に取っては、絶好の機会である。

——御坂美琴は直接施設を襲撃し、計画を頓挫させようと動いている。だがそれでは例え完遂したとしても計画が中止する可能性は低い。

それだけ絶対能力者という存在は大きいのだ。誰もが到達したことがないレベル6は。

過去に幾人の研究者がレベル6への到達を目指したが、悉く失敗に終わった。なかには実験するまでもなく樹形図の設計者の予測演算によって絶望的だと導き出されたものもある。

だが今回は樹形図の設計者の予測演算が成功をはじきだしたのだ。今まで誰もなし得なかった栄光。研究者ならば誰もが夢見るだろう。

そのため何としても計画を存続させようとするはずだ。利権さえ考えなければ外部の研究機関に研究の引き継ぎを行うだけだ。事実、彼女の予想通りに研究の移送を今行っている。

となるとそれ以外の方法で計画を妨害するしかない。利で計画を覆す事はできないのだから。調整中の妹達がいる部屋へ向かう。妹達の移送は最後のはずだ。洗脳装置に妹達がいる。まだ調整中の状態だ。慣れた手つきでコンソールを操作する。そして白衣のポケットから取り出した記憶媒体を端末に差し込んだ。

これは量産型能力者計画の頃から妹達の為に集めていた感情データを改修したものだ。本来これを使うつもりはなかった。これはあくまでプログラムに過ぎないし、いつか自然な形で妹達の真の感情が芽生えて欲しいと考えていたからである。それでも集めていたのは最後の手段として、妹達の感情の発露に役立つのではと考えたからだ。

しかし今はそうもいつてられない。とある感情に特化したデータを調整中の妹達に強制入力する。その感情とは『恐怖』。

研究者達は妹達を実験動物としてしか見ていない。だからこそ二万人殺すことになっても、何の感慨もないのだ。

だが、もし妹達に恐怖のプログラムを入力したら。

死を当然のこととして受容する妹達の中からその運命を嘆く者が現れるかもしれない。その姿に実験動物以上のものを感じ取る研究者が現れるかもしれない。そんな彼女達の声が誰かの心を動かし、計画を中止させるかもしれない。

利ではなく情。研究の関係者の良心に訴え計画を中止させるのが彼女の妨害方法。

もちろんすぐに効果があるかと言われればNOだ。可能性も高くはない。妹達も何人か犠牲になるかもしれない。だがその可能性に賭けた。自分と00000号のような関係が誰かしら築けると信じて。

ガンッ——！

いきなり後頭部を押さえ付けられ、コンソールに叩きつけられる。

「関係者である可能性を考慮して上に確認をとりましたが」

顔はコンソールに押さえ付けられたまま、腕をねじられ即座に拘束された。

「データ類の移送が完了するまではここへの立ち入りは超禁止のことでした」

「ぐ……あ……」

拘束した少女はねじる力が増した。布束砥信は思わず声を上げる。

「襲撃者は単独犯であると推測されているが一方の襲撃が超陽動である可能性を捨てるべきではない——どうやら麦野の読みは超当たっていたようですね」

布束を拘束する少女の名は絹旗最愛。今回の襲撃事件で施設防衛の依頼を請けた学園都市の暗部「アイテム」の構成員である。

「このまま依頼人に引き渡します。抵抗しても超無駄です」

背後にいる柄の悪い二人の男が近づく。

（無駄な抵抗？確かにそうかもしれない——）

布束は思う。問題は計画だけではない。仮に計画が頓挫しても、クローンが普通に生活できるだろうか？さらに過酷な運命になるだけではないか？迷いがないわけではない。

だがしかし、計画の全貌を知り一人で立ち向かうと覚悟し、全てを背負い込んだ少女がいた。こんな自分を信じて動いた少女がいた。

だから止まるつもりはない——！あの子達に運命を切り拓くチャンスを！

「……………！」

絹旗は異変に気付き布束を投げ飛ばして、コンソールを叩き壊す。だが一足遅かった。

端末の画面には、「インストールが完了しました。ミサカネットワークに接続しています」と表示されていた。布束は絹旗に見えないように片手でコンソールを操作し、入力を完了していたのである。

ニヤリと笑う布束。これで入力した感情プログラムは全ての妹達に共有される。誰にも止められない！

はずだった。

端末から警告音が流れ、接続がネットワーク側から中止された旨のメッセージと「上位個体20001号のものでないコード」という

警告メッセージが表示されたのである。どうやら上位個体を介さないネットワークを使うことができないらしい。だがしかし、上位個体など存在しなかったはずだ。

（何だこれは！？いつの間にこんなセキュリティが………！！）

「よく分かりませんが、あなたの目論見は超失敗したようですね」

絹旗の言葉に布束の顔は絶望に染まった。

第十九話（後書き）

この時点でアイテムいたの？といわれると疑問ですが参戦させました。

上位個体に関しても悩みましたが、個体が存在しなくてもセキユリティ自体は設定できると思ったので、そのままです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8634w/>

とある科学の完全調整（フルチューニング）

2011年10月10日08時24分発行